

もてす、荒陬をさして、アマサカルヒナなどいひしは、天を離るゝ事の遠く、日の御蔭なきの義なるべし、さらばヒナとは日無也、後に漢字を得て、夷の字讀てヒナといふ、舊事紀日本紀に、下照姫の歌を今號夷曲ナシタヒナヅリとしるされ、アマサカルヒナとは天離夷也と、釋日本紀に注せしが如き是也、舊にヒナとは日長也、田舎のつれりにして、日長きを云ふなりなど見えたれど、下照姫の御歌に、アマサカルヒナといふ言葉始るなり、上古の代に夫等の義によりてかゝる詞あるべしとも思はれず、田舎讀てキナカなどいふ事は、ヒナといふ語の轉ぜしにやあるべき、

〔倭訓栞前編二十五〕ひな 邊鄙をいふ、神代口訣に日無の義也といへり、日本紀に蠻夷を訓せり
高日の國に對し、天子のましまさぬ所をいふ也、よて天さかるひなとつゝけたり、一説に日の下
にて、天に對して下國をいふといへり、歌にひなのわかれ、ひなの長路、ひなのあら野などもよめ

〔日本書紀神代〕一書曰○略 中 歌之曰、阿磨佐箇屢避奈菟謎迺以和多邏素西渡○略 中 此兩首歌辭今號夷曲、

〔冠辭考〕一あまざかる ひむなかつひ

神代紀に、阿磨佐箇屢避奈菟謎迺○中
て見ゆるよしにて、天放るとは冠らせたり、さかるとは、こ、より避り離れて遠きをいふ。古事記に奥疎神訓疎云、万葉卷十三に夷離國治爾登、夷治爾等、なほ集中に里放、澳放、振離見放など有も、さかるは同じ語也、さて天ざかるのさは、音便にて濁るべき例也、よりて集中に安麻射加流と書いて、射は専ら濁る語に用ゆ、且夷ざかるも同じ意なるに、それに謝の字をしも書し也。ひなは田居中也、そのたるなかの上下を略き、且るとひを通はせてひなといへり、即るなかてふも、田を略きて、いふにて同じ意なるを思へ。

〔書言字考節用集一
乾坤田舍邊鄙云爾又作夷中義同斥